

## 2022年4月3日 聖餐式説教

聖餐の最初は、平和のあいさつです。互いに主の平和といってあいさつをします。日本であいさつという与会積が多いですけど、握手で行う場合もあります。海外では抱擁ということもあります。ヨハネによる福音書第20章19節に、「週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた」とありますように、この平和のあいさつは復活の主イエスが弟子たちとともになされたあいさつなのです。そして復活の主をわたしたちもこの聖餐式に迎え、主イエスとともにあるわたしたちが互いに平和のあいさつをかわすわけです。弟子たちと同様に、わたしたちも復活の主イエスと、そして復活の主イエスと共に集まる人々と共に平和のあいさつをかわすのです。ここにも現在の聖餐式が交わりを重視していることがよくあらわれています。

続いて奉献に入ります。御名にふさわしい栄光を主に帰し、供え物をささげましょう。わたしたちのささげものが主の御心にかないますようにとの願いです。

この時にパン・ブドウ酒、そして信施がささげられます。信施もこの時に集めて一緒にささげられます。

聖餐式は、主イエスが十字架につく前の晩に弟子たちと共になされた最後の晩餐に時間と距離を超えてわたしたちも一緒に連なる礼拝であることをすでに学びましたが、この時に主イエスのなされた動作が4つあります。すなわち、パンを取り、感謝して、裂き、弟子たちに与えたということです。取る、感謝する、裂く、与える、の4つです。これを四つのアクションと呼んでおり、聖餐式の中でその中心となる大切な事柄です。そのため聖餐式の中でもこの四つのアクションを重視して礼拝が組み立てられています。奉献が、取る、聖別が、感謝する、そしてパンを裂く、与えるが陪餐となるわけです。奉献は、最後の晩餐で一同が食事をしている時主イエスがパンを取られたことを現す部分であるわけです。

続いて聖別に入ります。聖別の中核をなすのは私たちのささげる主なる神への感謝賛美です。この感謝賛美を通してパンとブドウ酒が主イエスの体と血をあらわす存在へと聖別されるのです。

現在の祈祷書では聖別祈が二つ用意されており、どちらかを選んで使用することになっています。最初のものは伝統的な聖公会の聖別式文、二つ目はヒッポリュトスの奉献文に基づいたもので、教会が東西両教会に分裂する以前の最古の感謝聖別

式文として知られています。キリスト教は現在数多くの教派に分かれており、再一致へ向けての取り組みがなされていますが、この聖別式文も諸教会で今ヒッポリュトスの聖別式文を基本として同一方向に向かっていきます。この聖別式文は、特にキリスト者一致のためにささげられる聖餐式において用いるのがふさわしいと言えます。

一つ目の聖別式文を見てみましょう。最初に世界を創られた主なる神への賛美、そして旧約以来の父なる神とみ子の救いのみ業への感謝、聖霊を遣わし、教会を建て、わたしたちを神の民として立てられたことへの感謝がなされます。そして賛美として「せいなるかな」が歌われます。

続いて聖別の祈りは、パンとぶどう酒を主イエスの体と血を現す存在とされるよう、聖霊を求める祈りがなされます。

次に主イエスが聖餐式を定められた言葉が用いられます。聖別の中心ともいえる部分です。この言葉を制定語と呼んでいます。主イエス渡される夜で始まるこの部分は、聖書の福音書や使徒書にその記事が書かれていますが、聖餐式の際にもちいられているのは、コリントの信徒への手紙1第11章23節から25節の引用です。どうして福音書から引用しないで使徒書であるコリントの信徒への手紙1から引用するのかといいますと、もっとも古くかかれた、すなわち主イエスがこの世におられた時にもっとも近いのがコリントの信徒への手紙であるからです。一番古いということは、主イエスの時代の最も近い、従って主イエスがなさったことに一番忠実に書かれていると理解されているわけです。

ローマカトリック教会においては、この制定語の部分をもってパンとブドウ酒が主イエスの体と血に変化すると理解しており、この部分を聖変化と呼んでいます。聖変化の瞬間があると理解しているわけです。わたしたちの聖公会では、聖別祈全体を通して聖別され、現在のところ、聖別の瞬間は存在しないとの考えに立っています。

続いて、主イエスと体をいただいたわたしたちが、主の御心にかなう者とされるように聖霊を求める祈りがなされ、最後は栄光の賛美で終わります。聖別祈の最後の部分は一同で唱えますが、これはエフェソの信徒への手紙第3章20節から21節の引用です。

こうして主イエスの四つのアクションのうち、パンを取り、感謝しての部分が終わり、聖餐式は陪餐へと入っていきます。次週続けて学んでまいりましょう。